

バングラデシュ村落の女性のリプロダクティブ・ヘルス MDGs がもたらしたもの

企画者：松岡悦子（奈良女子大学 アジア・ジェンダー文化学研究センター）
話題提供者：五味麻美（川崎市立看護大学）・諸昭喜（国立民族学博物館）・曾 璟蕙
（奈良女子大学 アジア・ジェンダー文化学研究センター）、嶋澤恭子（大手前大学）
司会：松岡悦子（同上）

企画趣旨(目的)

このセッションでは、バングラデシュ村落での女性のリプロダクティブ・ヘルスを題材に、MDGs と SDGs のためにとられた政策が、必ずしも女性の健康にプラスになっていない可能性を提起する。その上で、女性の健康改善のためにどのようなことが役立つのかを、参加者との議論の中で検討したい。

バングラデシュのマダリプル県ラジョール郡で、2015年～2021年にかけて断続的に行った調査データ（質問紙、インタビュー、参与観察）を用いる。妊娠・出産経験のある女性たちにインタビューと参与観察を行い、現地の調査助手に依頼して質問紙（2016年回答数514名、2021年626名）調査を行った。バングラデシュでは、児童婚の習慣がリプロダクティブ・ヘルスに影響を与えており、さらにコロナ禍で児童婚が増えているとされる。しかし、若い世代では男女の結婚観に変化が見られ、教育を重視する姿勢が現れている。妊娠・出産・産後の時期にバングラデシュ農村部の女性たちが服用する薬は多種類で数が多く、薬剤師、医師以外にも無資格者やさまざまな人たちが薬の配布に関わっている。妊婦は症状ごとに複数の薬をとることで経済的な負担を抱えるとともに、母児への健康被害が懸念される。また、MDGs、SDGsにおいて施設分娩が推奨された結果、女性たちの出産場所は自宅から病院へと大きくシフトした。病院出産になった女性の9割が帝王切開となり、このような出産形態の変化が女性の産後の健康に大きな影響を及ぼしている。とくに、私立病院ではブローカーを雇って産婦に病院に行くように働きかけ、不必要な帝王切開を勧めているとされるが、病院で産むようにという国の政策は女性たちが私立病院で産むことを後押ししているように見える。さらに、帝王切開で引き起こされる女性たちの産後の回復の遅れと健康上の障害は、母乳育児の妨げにつながっている。哺育方法における母乳と混合の割合は、経膈分娩と帝王切開の割合に相関しており、かつ自宅出産と病院出産の割合にも有意に関連している。このように、妊娠・出産が医療の管轄下で行われるようになるにつれて、妊産婦死亡率や新生児死亡率は低下しつつあるものの、女性の健康にはかえってマイナスと思われる事態が生じている。MDGsにおいて、妊産婦死亡率を低下させるという国際的な目標は、死亡率の減少をめざすというプラス面が強調されるが、その裏面で女性のリプロダクティブ・ヘルスが害される可能性がある点にも注意を向けたいと考える。